

報告

成人保健看護における看護過程演習の臨床実習への学習効果

石川りみ子¹⁾ 上間直子¹⁾ 金城利香¹⁾ 仲宗根洋子¹⁾ 赤嶺伊都子¹⁾
前原なおみ¹⁾ 比嘉かおり¹⁾ ミヤジマ厚子¹⁾ 吉川千恵子¹⁾ 伊藤幸子¹⁾

当大学3年次に対し、授業科目「成人保健看護方法Ⅱ」で行った看護過程演習が、その後「成人保健看護実習Ⅱ」においてどう役立ったか、看護過程演習の学習効果を評価し、看護過程演習と成人保健看護実習の教授方法を検討することを目的としてアンケート調査を行ったところ以下の知見が得られた。

- 1) 看護過程演習で模擬患者として選定した11症例は、90%前後の学生が「役立った」と解答したことから、病気を持った成人の看護を理解することと、看護実践において重要な鍵概念を学習するための症例としては適切であった。
- 2) 看護過程演習は、役立ったとする得点化の平均が58.7で、また、役立った割合が20項目中18項目が70%以上を占め、9項目は80%以上と高値であったことから、演習は総じて臨床実習において役立ったと考える。
- 3) 役立ったとする得点化の平均値で演習グループ毎に比較すると、乳がんの症例と外傷の症例で学んだグループの得点は他の症例で学んだグループより低い傾向がみられた。しかし、項目別にみみると、他のグループにおいても低値がみられたため、項目によってはどのグループにおいても症例の示し方や演習のかかわり方に検討を要することが示唆された。
- 4) 看護計画段階の項目と看護実践段階の各項目との相関係数においては、「目標設定」と「計画立案」がすべての看護実践の項目とに有意な相関が認められたことから、看護過程演習の学習効果が看護の実践を学習する上で有効であったことが伺えた。

キーワード：看護過程演習、臨床実習、役立ち、学習効果

I 緒言

看護実践に必要な判断能力、問題解決能力の育成は、看護基礎教育において重要な位置を占める。成人保健看護において「看護過程」学習は、問題解決能力を養い、看護を系統的、科学的、個別的に実践することを学習するための有効な方法^{1)~3)}とされている。

当大学看護学部の「成人保健看護方法Ⅰ、Ⅱ」の授業科目では、「看護過程」を教授しているが、3年次の「成人保健看護方法Ⅱ」においては、模擬患者を用いて看護過程のグループ学習を行っている。看護過程演習のねらいとして、看護過程を展開するための基礎的な知識と技術を学ぶこともさることながら、病気を持った成人の看護の理解と、看護実践において重要な鍵概念を学習することもあげられよう。演習後引き続き、内科病棟で行われる慢性期看護実習の「成人保健看護実習Ⅱ」で「看護過程」を展開して実習しているが、演習と臨床実習を有機的に関連させた学習評価はまだ行われていない。

そこで、本研究は、看護過程演習がどのように臨床実習に役立っているか、また看護過程演習の学習効果を評価し、看護過程演習と成人保健看護実習の教授方法を検討することを目的とした。

II 研究方法

1. 調査対象者

対象者は、当大学3年次72名である。平成13年度前期、授業科目「成人保健看護方法Ⅱ」において看護過程演習を表1に示すとおり2回行い、その後3週間の「成人保健看護実習Ⅱ」を終了後に、一斉に教室でアンケート調査を行った。調査に際し、了解の得られた学生のデータのみ集計を行った。調査内容は、表2のとおりで、①演習1、2で取り扱ったテーマ(患者の疾患名)、②臨床実習における受持ち患者の疾患名、③看護過程演習の有用性に関する質問20項目、すなわち情報収集から計画立案までの一連のプロセスに関する項目、看護過程の各段階の関連性に関する項目および看護過程と実践に関する項目、④症例の選定に関する項目である。看護過程演習が役立ったかについては「かなり役だった」を4、「全然役に立たなかった」を1とし、その間を2、3として4段階で得点化した。また、看護過程演習が全体的にどの程度役立ったかを測るため、20項目の総得点を合計して、80点を満点とし、全体および演習グループ毎に平均値を算出した。演習グループ毎の平均値の差はt検定を行った。さらに、各項目は4段階ごとに分布(割合)を算出した。

1) 沖縄県立看護大学

表1 看護過程演習の進め方

I. 看護過程演習1 (8時間)

学習目標

1. 模擬患者(ペーパーペイシャント)を用いた演習をとおして、代表的ながん患者(イ~ホ)の看護過程を、学習する。
2. 看護過程の構成要素について理解し、問題に即した看護計画(目標、解決策)を立案できる。

演習の方法

1. 5~6人1グループの7グループ、計14グループを編成する。
2. 下表のとおりテーマ(疾患名)に沿って、各グループともペーパーペイシャントで演習を進める。
イ) 乳がん、ロ) 大腸がん、ハ) 肺がん、ニ) 胃がん、ホ) 脳腫瘍
3. 演習テーマ毎に1名の指導教員がグループの指導にあたる。
4. 示された模擬患者(ペーパーペイシャント)について把握する。
 - 1) 患者の身体的、精神的、社会的側面から特徴を把握する。
 - 2) 家族歴、既往歴、現病歴など健康に関する情報を捉える。
 - 3) 治療・検査に関する情報および入院後の経過に関する情報を捉える。
5. 示された模擬患者看護過程の展開における構成要素・段階を理解する。
 - 1) アセスメント
患者の情報をどうアセスメントしたかその意味を考える。
 - 2) 看護診断・共同問題(優先度を考慮する)
アセスメントから導き出された看護診断・共同問題について理解する。
6. 看護計画の段階においてケア計画を立案する。
 - 1) 目標
問題に即した目標を設定する。
 - 2) 計画
Observational Plan, Therapeutic Plan, Educational Planで具体策を立案する。
7. 看護過程演習Iの全体報告会を行う。

II. 看護過程演習2 (8時間)

学習目標

1. 模擬患者(ペーパーペイシャント)を用いた演習をとおして、下記の患者(イ~へ)の看護過程を学習する。
2. 看護過程の構成要素について理解し、情報のアセスメント、関連図の作成、看護診断・共同問題の抽出ができる。

演習の方法

1. 6人1グループの6グループ、計12グループを編成する。
2. 下表のとおりテーマに沿って、各グループともペーパーペイシャントで演習を進める。
イ) 心筋梗塞、ロ) くも膜下出血、ハ) 急性肝炎、ニ) COPD、ホ) 外傷、ヘ) 糖尿病
3. 演習テーマ毎に1名の指導教員がグループの指導にあたる。
4. 示された模擬患者(ペーパーペイシャント)について把握する。
 - 1) 患者の身体的、精神的、社会的側面から特徴を把握する。
 - 2) 家族歴、既往歴、現病歴など健康に関する情報を捉える。
 - 3) 治療・検査に関する情報および入院後の経過に関する情報を捉える。
5. ツールを用いて整理された患者の情報をアセスメントする。
6. 患者の情報を関連図(sequence of events)に整理する。
7. アセスメントから導き出された看護診断・共同問題を整理する。
8. 看護過程演習2の全体報告会を行う。

石川他：成人保健看護における看護過程演習の臨床実習への学習効果

表2 看護過程に関連する20項目

成人保健看護方法Ⅱで行った看護過程演習1と2ほどの程度役に立ちましたか。 Q1～Q20 について以下の4つの選択肢から一つ選ぶ	
1 かなり役立った 2 役立った 3 あまり役立たなかった 4 全然役立たなかった	
Q1	臨床実習において演習1と2は、“受持患者の身体的・精神的・社会的な患者情報”を収集する上でどの程度役立ったか
Q2	臨床実習において演習1と2は、“健康に関する情報”を収集する上でどの程度役立ったか
Q3	臨床実習において演習1と2は、入院に関する情報を収集する上でどの程度役立ったか
Q4	臨床実習において演習1と2は、ツールを用いてアセスメント(分析・統合)する上でどの程度役立ったか
Q5	臨床実習において演習1と2は、患者の情報を関連図(sequence of events)にまとめる上でどの程度役立ったか
Q6	臨床実習において演習1と2は、看護診断・共同問題を抽出する上でどの程度役立ったか
Q7	臨床実習において演習1と2は、看護診断・共同問題の優先度を判定する上でどの程度役立ったか
Q8	臨床実習において演習1と2は、問題に即した目標を設定する上でどの程度役立ったか
Q9	臨床実習において演習1と2は、ケア計画を立案する上でどの程度役立ったか
Q10	臨床実習において関連図(sequence of events)の作成は問題抽出する上でどの程度役立ったか
Q11	臨床実習において看護問題の抽出は看護計画を作成する上でどの程度役立ったか
Q12	臨床実習において目標を立てることは、看護実践の評価をする上でどの程度役立ったか
Q13	臨床実習において看護計画の立案は患者の目標を設定する上でどの程度役立ったか
Q14	臨床実習において看護計画の立案は系統的に看護を実践する上でどの程度役立ったか
Q15	臨床実習において看護計画の立案は患者の安全安楽にどの程度役立ったか
Q16	臨床実習において看護計画の立案は、患者に個別的なケアをする上でどの程度役立ったか
Q17	臨床実習において看護過程は、科学的に看護を実践する上でどの程度役立ったか
Q18	臨床実習において看護過程は、継続看護を考える上でどの程度役立ったか
Q19	臨床実習において看護過程は、家族を含めた患者支援をする上でどの程度役立ったか
Q20	臨床実習において看護過程は、より良いケアを実践する上でどの程度役立ったか

III 結果

学生の有効回答数は、72名中70名97.2%で、平均年齢 21.6 ± 2.5 歳、性別は男性6名(8.6%)女性64名(91.4%)であった。成人保健看護実習Ⅱにおいて学生が受け持った患者の主な症例は22疾患にわたった。最も多かった疾患は脳卒中19名(27.1%)で、次いで心筋梗塞11名(15.7%)、腎不全6名(8.6%)、肺がん・COPD7名(10.0%)、糖尿病5名(7.1%)であった。

看護過程演習1, 2で取り上げた症例の選定にあつ

ては、「病気をもった成人の看護を理解する上で役立った」と解答した学生は表3に示すとおり90%以上を占めた。模擬患者の示し方についても同様に高値であった。

1. 看護過程得点の演習グループ毎の比較

臨床実習において、看護過程の演習が学生個々にとってどの程度役立ったかを把握するため、演習に関する設問の各項目に「かなり役立った」を4点、「全然役に立たなかった」を1点として得点化し、20項目の合計点(80点満点)の平均値(N=70)は、 58.7 ± 8.5 であった

(表4)。演習グループの平均値をみても、70名全体の平均値より2.0以上下回ったのは、乳がんグループ 54.1±10.1、外傷グループ54.1±7.8であったが有意ではなかった。

表3 看護過程演習テーマ別症例の役立ち

	演習テーマ	成人看護の理解				合計人数 (%)	全体像の把握				合計人数 (%)
		役立つ		役立たない			役立つ		役立たない		
		かなり思う 人数 (%)	思う 人数 (%)	あまり 思わない 人数 (%)	全然 思わない 人数 (%)		かなり思う 人数 (%)	思う 人数 (%)	あまり 思わない 人数 (%)	全然 思わない 人数 (%)	
看護過程演習 1	1 乳がん	18(26.1)	46(66.7)	3(4.3)	2(2.9)	69 (100.0)	15(21.4)	47(67.1)	8(11.4)	0(0.0)	70 (100.0)
		64(92.8)		5(7.2)			62(88.6)		8(11.4)		
	2 大腸がん	16(23.5)	49(72.1)	3(4.4)	0(0.0)	68 (100.0)	15(21.7)	48(69.6)	6(8.7)	0(0.0)	69 (100.0)
		65(95.6)		3(4.4)			63(91.3)		6(8.7)		
	3 肺がん	19(27.5)	44(63.8)	6(8.7)	0(0.0)	69 (100.0)	15(21.7)	48(69.6)	6(8.7)	0(0.0)	69 (100.0)
	63(91.3)		6(8.7)			63(91.3)		6(8.7)			
	4 胃がん	16(23.9)	48(71.6)	3(4.5)	0(0.0)	67 (100.0)	14(20.3)	49(71.0)	6(8.7)	1(0.0)	69 (100.0)
		64(95.5)		3(4.5)			63(91.3)		6(8.7)		
	5 脳腫瘍	20(29.9)	43(64.2)	4(6.0)	0(0.0)	67 (100.0)	16(23.2)	46(66.7)	7(10.1)	0(0.0)	69 (100.0)
		63(94.0)		4(6.0)			62(89.9)		7(10.1)		
看護過程演習 2	1 心筋梗塞	23(33.3)	45(65.3)	1(1.4)	0(0.0)	69 (100.0)	15(21.7)	49(71.0)	5(7.2)	0(0.0)	69 (100.0)
		68(98.6)		1(1.4)			64(92.8)		5(7.2)		
	2 くも膜下出血	21(30.4)	44(63.8)	3(4.3)	1(1.5)	69 (100.0)	13(18.8)	49(71.0)	5(7.2)	2(2.9)	69 (100.0)
		65(94.2)		4(5.8)			62(89.9)		7(10.1)		
	3 急性肝炎	17(24.6)	49(71.0)	3(4.3)	0(0.0)	69 (100.0)	13(18.8)	49(71.0)	7(10.1)	0(0.0)	69 (100.0)
		66(95.7)		3(4.3)			62(89.9)		7(10.1)		
	4 COPD	19(27.5)	47(68.1)	3(4.3)	0(0.0)	69 (100.0)	11(15.9)	52(75.4)	5(7.3)	1(1.4)	69 (100.0)
		66(95.7)		3(4.3)			63(91.3)		6(8.7)		
	5 外傷	13(18.6)	51(72.9)	5(7.1)	1(1.4)	70 (100.0)	11(15.7)	51(72.9)	6(8.5)	2(2.9)	70 (100.0)
		64(91.5)		6(8.5)			62(88.6)		8(11.4)		
	6 糖尿病	26(37.7)	40(58.0)	3(4.3)	0(0.0)	69 (100.0)	20(29.0)	45(65.2)	3(4.4)	1(1.4)	69 (100.0)
		66(95.7)		3(4.3)			65(94.2)		4(5.8)		

表4 看護過程得点の演習グループ毎の比較

	グループ名	平均±SD (人数)	それ以外のグループ の平均±SD (人数)	t-検定
看護過程演習 1	1 乳がん	54.1±10.1 (n=14)	59.9±7.7 (n=56)	†
	2 大腸がん	61.7±8.4 (n=16)	57.9±8.4 (n=54)	
	3 肺がん	58.2±8.4 (n=14)	58.9±8.6 (n=56)	
	4 胃がん	59.1±6.7 (n=15)	58.7±9.0 (n=55)	
	5 脳腫瘍	60.5±7.7 (n=11)	58.4±8.7 (n=59)	
看護過程演習 2	1 心筋梗塞	59.8±7.3 (n=12)	58.5±8.7 (n=58)	
	2 くも膜下出血	60.4±7.4 (n=12)	58.4±8.7 (n=58)	
	3 急性肝炎	57.2±5.0 (n=11)	59.0±9.0 (n=59)	
	4 COPD	58.8±12.2 (n=13)	58.7±7.5 (n=57)	
	5 外傷	54.1±7.8 (n=9)	59.4±8.4 (n=61)	†
	6 糖尿病	60.7±8.9 (n=13)	58.3±8.4 (n=57)	
	全体	58.7±8.5 (n=70)		

† P < 0.10

石川他：成人保健看護における看護過程演習の臨床実習への学習効果

2. 看護過程各項目の分布 (Q1~Q20)

看護過程の演習が臨床実習において「かなり役立った」、
「役立った」と解答した学生数の割合が70%を占めた項目の内容をみると、表5に示すとおり、情報収集の3項目はQ1: 74.3%、Q2: 70.0%で、Q3: 「入院に関する情報」については57.1%の学生にとってのみ役立っていた。Q4「アセスメント」とQ5「関連図作成」については2項目とも80%以上で、看護診断の2項目についてはQ6: 78.6%とQ7: 75.7%であったが、Q10「関連図作成が問題抽出に役立ったか」では80.0%と高

い値を示した。計画立案については、Q8「目標設定」71.4%、Q9「ケア計画立案」72.9%であったが、Q11「問題抽出と看護計画」、Q12「目標と評価」、Q13「看護計画と目標設定」については85%以上を占めた。実践に関する7項目では、Q14「系統的実践」、Q16「個別ケア」、Q20「よりよいケア」についても80%以上で高値を示した。Q18「継続看護」は78.6%、Q15「安全・安楽」74.3%、Q17「科学的実践」72.9%と実践項目の中では比較的低値であり、Q19「家族を含めた支援」については55.7%と最も低い値を示した。

表5 演習グループ別看護過程各項目の役立ちの割合

		数値は役立ったと解答した者の割合 %																			
項目	情報1	情報2	情報3	アセスメント	関連図	問題抽出	問題の優先度	目標	看護計画	Q10	関連図-問題抽出	目標設定-実践の評価	看護計画-目標設定	看護計画-系統的看護	看護計画-安全安楽	看護計画-科学的看護	看護計画-個別ケア	継続看護	家族支援	よりよいケア	
																					Q1
全体の割合		74.3	70.0	57.1	87.1	80.0	78.6	75.7	71.4	72.9	80.0	91.4	81.4	85.7	81.4	74.3	84.3	72.9	78.6	55.7	81.4
看護過程演習1	乳がん n=14	57.1	57.1	35.7	85.7	64.3	64.3	57.1	64.3	57.1	64.3	92.9	85.7	85.7	85.7	78.6	85.7	64.3	85.7	64.3	78.6
	大腸がん n=16	81.3	75.0	75.0	93.8	81.3	81.3	81.3	75.0	81.3	87.5	100.0	81.3	100.0	93.8	87.5	87.5	87.5	81.3	50.0	87.5
	肺がん n=14	64.3	57.1	42.9	85.7	92.9	85.7	64.3	64.3	78.6	78.6	85.7	85.7	78.6	71.4	71.4	78.6	78.6	71.4	57.1	85.7
	胃がん n=15	86.7	80.0	60.0	93.3	80.0	80.0	86.7	73.3	73.3	86.7	93.3	80.0	93.3	73.3	60.0	86.7	60.0	80.0	60.0	80.0
	脳腫瘍 n=11	81.8	81.8	72.7	72.7	81.8	81.8	90.9	81.8	72.7	81.8	81.8	72.7	63.6	81.8	72.7	81.8	72.7	72.7	72.7	63.6
看護過程演習2	心筋梗塞 n=12	75.0	75.0	58.3	83.3	75.0	66.7	75.0	83.3	66.7	83.3	91.7	91.7	91.7	75.0	75.0	91.7	66.7	66.7	66.7	83.3
	くも膜下出血 n=12	75.0	58.3	41.7	91.7	75.0	66.7	75.0	83.3	83.3	83.3	83.3	83.3	58.3	66.7	75.0	75.0	66.7	41.7	41.7	75.0
	急性肝炎 n=11	72.7	63.6	54.5	81.8	100.0	81.8	72.7	63.6	63.6	90.9	90.9	81.8	81.8	90.9	81.8	90.9	81.8	63.6	63.6	72.7
	COPD n=13	84.6	84.6	53.8	92.3	84.6	92.3	92.3	76.9	92.3	76.9	92.3	61.5	84.6	76.9	69.2	84.6	76.9	76.9	61.5	76.9
	外傷 n=9	55.6	55.6	55.6	77.8	66.7	55.6	55.6	55.6	55.6	66.7	100.0	88.9	77.8	100.0	77.8	88.9	77.8	66.7	77.8	88.9
	糖尿病 n=13	76.9	76.9	61.5	92.3	76.9	92.3	84.6	69.2	69.2	76.9	92.3	84.6	92.3	92.3	76.9	76.9	76.9	76.9	30.8	61.5

3. 看護過程各項目における演習グループ間の比較

看護過程に関連した設問の各項目に対して「役立った」と解答した学生数の割合を演習グループ別に算出し、各項目毎に比較してグループ個々の傾向をみると、表5に示すとおりである。全体の「役立った」とする割合より下回ったのは、情報収集Q1からQ3の3項目については乳がん、肺がん、急性肝炎、外傷グループであった。くも膜下出血グループはQ3「入院に関する情報」は91.7%と高値であったが、一方でQ2「健康に関する情報」に対しては、58.3%と低値であった。情報収集の3項目とも50%台以下のグループは乳がんと外傷グループであった。アセスメントから計画立案に関連する項目をみると、Q4「アセスメント」で脳腫瘍が72.7%とやや低く、Q5「関連図」においては乳がん、外傷グループが低値を示したが、肺がん、急性肝炎グループは92%以上の高値を示した。Q6「問題抽出」については、乳がん、心筋梗塞、外傷グループが、Q7「優先度の判

定」は乳がん、肺がん、くも膜下出血、外傷グループが60%台以下で、Q8「目標設定」、Q9「ケア計画立案」については乳がん、急性肝炎、外傷グループが2項目とも60%台以下であった。Q10「関連図と問題抽出」については乳がん、外傷グループにおいて、Q13「看護計画と目標設定」については脳腫瘍グループにおいて60%台と低値を示した。

次に、看護実践に関連する項目をみると、Q14「系統的実践」については、くも膜下出血グループが58.3%、Q15「安全・安楽」については胃がんグループ60.0%、くも膜下出血グループ66.7%と低値を示した。Q16「個別ケア」についてはどのグループも高値を示したが、Q17「科学的実践」については乳がん、胃がん、心筋梗塞グループにおいて60%台と低値を示した。Q18「継続看護」についてはくも膜下出血、外傷グループが60%台と低値を示したが、心筋梗塞、急性肝炎グループにおいては90%台と高値を示した。

Q19「家族を含めた支援」については全体的に低値であったが、胃がんグループは86.7%と高値であった。Q20「よりよいケア」については、脳腫瘍グループで63.6%と低値であったが、大腸がん、糖尿病グループで90%台と高値を示した。

4. 看護過程各項目間の関連性

計画と実践の関連性をみるため、看護過程の各項目をQ1からQ9までは看護計画、Q14からQ20を看護実践

として、看護計画と看護実践の各項目間の関連性をみるため表6に項目間の相関係数を示した。実践のすべての項目と有意に相関のあった項目はQ8「目標設定」(p<0.01)とQ9「ケア計画立案」(p<0.01)であった。また、Q17「科学的実践」は1項目を除いたすべての看護計画の項目に有意に相関していた(p<0.01)。Q18「継続看護」は情報収集の2項目とも有意に相関していた(p<0.01)。

表6 看護過程各項目間の相関係数

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q12	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18	Q19	Q20
Q1 情報1	1.000																
Q2 情報2	.742 **	1.000															
Q3 情報3	.592 **	.602 **	1.000														
Q4 コメント	.474 **	.504 **	.414 **	1.000													
Q5 関連図				.294 *	1.000												
Q6 問題抽出	.426 **	.451 **	.345 **	.568 **		1.000											
Q7 問題の優先度	.373 **	.394 **	.372 **	.502 **		.568 **	1.000										
Q8 目標設定	.420 **	.441 **	.376 **	.550 **		.581 **	.705 **	1.000									
Q9 看護計画の立案	.427 **	.391 **	.332 **	.530 **		.627 **	.572 **	.634 **	1.000								
Q12 目標設定-実践の評価			.316 **	.287 *			.251 *	.517 **	.348 **	1.000							
Q14 看護計画-系統的看護						.255 *	.306 *	.393 **	.490 **	.497 **	1.000						
Q15 看護計画-安全安楽								.334 **	.316 **	.549 **	.715 **	1.000					
Q16 看護計画-個別的ケア					.247 *			.453 **	.342 **	.552 **	.602 **	.588 **	1.000				
Q17 科学的実践	.270 *		.394 **	.312 **	.367 **	.452 **	.345 **	.505 **	.581 **	.501 **	.561 **	.456 **	.565 **	1.000			
Q18 継続看護	.342 **	.367 **					.267 *	.345 **	.384 **	.365 **	.432 **	.406 **	.560 **	.499 **	1.000		
Q19 家族支援			.306 *					.346 **	.252 *	.284 *	.238 *	.390 **	.413 **	.451 **	.591 **	1.000	
Q20 良いケア				.296 *	.258 *	.327 **		.466 **	.426 **	.445 **	.485 **	.520 **	.612 **	.607 **	.630 **	.577 *	1.000

* <0.05

** <0.01

注) 有意な相関係数のみ表示

IV 考察

看護過程演習のねらいとして、病気を持った成人個人の看護を理解することと、看護過程をとおして看護実践における重要な鍵概念を学習すること^{4, 5)}があげられる。看護過程演習の模擬患者を日本の成人層に多い代表的な疾患としてがん患者に5症例、系統別に呼吸器・循環器・消化器・脳血管系・内分泌系・骨関節系の6症例を選定したが、その11症例は、すべて90%前後の学生が「役立った」と解答したことから、適切であったと考える。看護過程演習後、引き続き行った「成人保健看護実習Ⅱ」の慢性期看護実習において、学生が受け持った症例の種類は22疾患と幅広かったにもかかわらず、役立ったと解答していることから演習における症例の選定は適切であったといえる。

看護過程演習に関する設問の得点化で「成人保健看護

実習Ⅱ」にどの程度役立ったかをみると、70名の平均は58.7であった。20項目すべて「役立った」と解答すると60になることと照らし合わせると「あまり役立たなかった」とする項目は3項目程度であり、総じて看護過程演習は臨床実習において役立ったものと考えらる。一方、各項目別に臨床実習において役立った割合を見てみると、「役立った」とする解答が、Q3「入院に関する情報」とQ19「家族を含めた支援」の2項目を除いた18項目が70%以上を占め、9項目は80%以上で高値であったことから、演習は臨床実習において役立ったといえよう。低値を示した情報収集に関する項目のQ3「入院に関する情報」の学生数の割合が50%と低かったのは、他の情報と比較して、患者の経過を患者カルテ、検査データ、医師所見や患者の症状観察などさまざまな場面や情報源を活用して把握しなければならぬため、模擬患者方式

石川他：成人保健看護における看護過程演習の臨床実習への学習効果

の情報では限界があるため、「役に立たなかった」と解答する学生が半数近くに及んだと考えられる。そのため、この項目に関しては、実習場面において指導・支援が強化されることが必要であると考ええる。Q19「家族を含めた支援」については、項目の中で最も低い値を示していたが、それは演習の方法と実習場面での実践の機会の有無によっても影響をうけることが予測されることから、症例の示し方の中で家族を含めた支援場面が十分であったかを検討することが必要である。また、実習場面においても、受持ち患者によってはその家族と会う機会が得られない場合もあり、家族を含めた支援を行うには初回の看護過程展開の実習では難易度が高く^{6, 7)} 次回の実習に期待される項目であろう。一方、看護実践のQ14「系統的実践」、Q16「個別ケア」、Q20「よりよいケア」は80%以上の高値を示したことから、看護過程演習が計画立案のみでなく、実践に重要な看護の概念の学びにも有用であると考ええる。

次に、役立ったとする得点化の平均値で演習グループ毎に比較すると、乳がんグループと外傷グループがそれ以外のメンバーより低い傾向がみられた。この2グループを各項目別にみても、情報収集から計画立案までのほとんどの項目が低値を示しており、学生にとっては臨床実習での計画案作成について、演習が役立ったとの認識がうすいといえる。しかし、看護実践に関連する面では他のグループ同様の結果が得られたことから、実践に重要な看護の学びについては演習が役立ったと考える。項目によっては他のグループにおいても低値を示しているため、症例の示し方や演習の指導面で検討を要することが示唆された。

看護過程に関連する設問の項目間の相関性については、看護計画段階の項目と看護実践段階の各項目との各々の関連性をみるため相関係数を求めたところ、「目標設定」と「計画立案」各々が看護実践の8項目すべてに有意な相関が認められた。このことは、演習が臨床実習での受持ち患者の「目標設定」と「計画立案」に役立ったことが、看護の「系統的実践」、「個別ケア」、「科学的実践」にも有意に相関していることから、看護過程演習の学習効果が看護の実践を学習する上で有効であったと考えられる。また、情報収集から計画立案までは「科学的実践」とも有意に相関していた。看護過程が問題の解決過程を踏んで、科学的根拠に基づいた看護を実践することをねらいとするならば、このことは、演習を実習に有機的に関連させることによって看護実践の学びも効果的に行えることを示唆している。「継続看護」には情報収集関連の2項目、および「目標設定」と「計画立案」に有意な相関性が認められ、模擬患者症例による「情報収集」、

「目標設定」、「計画立案」の演習が受持ち患者の退院後において継続看護を考える上でも効果が期待できると考えられる。

V 結論

「成人保健看護方法Ⅱ」で行った看護過程演習が、その後「成人保健看護実習Ⅱ」においてどう役立ったかについてアンケート調査を行ったところ以下の知見が得られた。

- 1) 看護過程演習で模擬患者として選定した11症例は、90%前後の学生が「役立った」と解答したことから、病気を持った成人の看護を理解することと、看護実践において重要な鍵概念を学習するための症例選択としては適切であった。
- 2) 看護過程演習は、役立ったとする得点化の平均が58.7で、また、役立った割合が20項目中18項目が70%以上を占め、9項目は80%以上と高値であったことから、演習は総じて臨床実習において役立ったと考える。
- 3) 役立ったとする得点化の平均値で演習グループ毎に比較すると、乳がんの症例と外傷の症例で学んだグループの得点は他の症例で学んだグループより低い傾向がみられた。しかし、項目別にみると、他のグループにおいても低値がみられたため、項目によってはどのグループにおいても症例の示し方や演習のかかわり方に検討を要することが示唆された。
- 4) 看護計画段階の項目と看護実践段階の各項目との相関係数では、「目標設定」と「計画立案」がすべての看護実践の項目に有意な相関が認められたことから、看護過程演習の学習効果が看護の実践を学習する上で有効であったことが伺えた。

文献

- 1) 逸見英枝，他：看護過程演習の臨床実習における役立ちの検討 —成人実習終了時学生アンケート調査より—，新見女子短期大学紀要，18巻，101-109，1997.
- 2) 江藤和子，他：成人看護学における看護過程演習の学習効果 —学生アンケートの分析から—，神奈川県立平塚看護専門学校紀要，6巻，25-33，1998.
- 3) 下枝恵子，他：看護学生の看護過程の学習に対する達成感とそれに影響を及ぼす要因 —学内演習と臨床実習における分析—，東京都立医療技術短大紀要，第11号，153-160，1998.
- 4) 東サトエ：臨床実習の教授＝学習構造に関する実証的研究 —看護過程の展開能力学習態度形成・教育的支援の関連性—，鹿大医短紀要，5巻，35-46，1995.
- 5) 三好さち子：成人看護学における看護過程の授業展

開と評価, Quality Nursing, 3(12), 13-20, 1997.

- 6) 板垣恵子, 他: 「成人看護Ⅰ」・「老人看護」実習における看護過程についての考察 - 中間レポートを中心とした「査定」に関する分析 -, 東北大医短部紀要, 8(1), 63-72, 1999.
- 7) 田村三穂, 他: 成人看護学実習の教育評価 (第2報) - 慢性期にある対象の看護の学習に関する質問紙調査より -, 聖母女子短期大学紀要, 第10号, 53-62, 1997.

Educational effectiveness of nursing process in practice on clinical training in Adult Health and Nursing

Ishikawa Rimiko, R.N.,M.H.S.¹⁾ Uema Naoko, R.N.,M.H.S.¹⁾
Kinjo Rika, R.N.,M.H.S.¹⁾ Nakasone Yoko, R.N.,M.H.S.¹⁾
Akamine Itsuko, R.N.,M.H.S.¹⁾ Maehara Naomi, R.N.,M.H.S.¹⁾
Higa Kaori, R.N.,M.H.S.¹⁾ Miyajima Atsuko, R.N.,M.S.¹⁾
Yoshikawa Chieko, R.N.,LL.B.¹⁾ Ito Sachiko, R.N.,B.S.N.¹⁾

The purposes of this study are to determine how the nursing process in "Adult Health and Nursing Practice II" for junior students is useful and to discuss the teaching methods used to teach nursing process and clinical practice by evaluating the effectiveness of learning.

Questionnaire was used to conduct the study and followings are found:

1. Due to the 90% of students answering "helpful" to the 11 hypothetical patients for practice in nursing process, using hypothetical patients is considered appropriate to understand the adult who has disease and key concepts in nursing practice.
2. In the rate of 1 to 100, the average score of usefulness of nursing process in training evaluated by the students was 58.7, and around 70% of students answered "useful" 18 out of 20 questions. Of these, the 9 questions were rated "useful" by more than 80% of students. From this finding, this practice is considered useful for the clinical practice.
3. Groups studying breast cancer and wound tended to score lower than the other groups. However, looking at the individual questions, there are lower scores in the other groups, too. Therefore, it is necessary to examine presentation of hypothetical patient and intervention during the practice.
4. From the finding that "setting goal" and "planning" interrelated significantly to all the question items regarding intervention, it was assumed that the nursing process in practice is useful to develop clinical practice.

Key word: Nursing process in practice, clinical training, usefulness, educational effectiveness.

1) Okinawa Prefectural College of Nursing